

◆水明インターネット句会◆ 令和七年五月		1	春雨や明るく音も無く濡らし
		2	蓮の花開く微音と微動かな
		3	口遊ぶドレミファソラシ柿若葉
		4	乙女らの長き脚線夏隣
		5	囑託の仕事に慣れし四月尽
		6	朝露も涙も拭ふ青葉風
		7	アカシアの花がセンター防砂林
		8	顔真つ赤甘酒呑みし下戸な我
		9	隣家より鼻歌交じり夏の宵
		10	お喋りのざわざわ聞こえ花は葉に
		11	早緑の葉の重なれる若楓
		12	麦の穂のそよぎに見ゆる風の様
		13	戸を少し開けて燕とまた暮らす
		14	柔らかき風の野づらを揚羽蝶
		15	濃く淡く若葉の影す石畳
		16	里山に俯瞰の生地柿若葉
		17	つみかさね崩るる兆し薔薇の箱
		18	子育ての燕見守る逆さ傘
		19	起立礼着席声も更衣
		20	母の日の新教皇に乾杯す

◆水明インターネット句会◆																				令和七年五月
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	
紫のアイリスの群れ白ひとつ	ふるさとは雲追ふ風に辛夷咲く	助けての娘すくはぬ棒振虫	薄紅の薔薇のトンネル妻とゐて	代掻きや牛の声と香過ぎし日に	ふぞろひの園児はじける若葉風	風薫る萌葱に染むる和菓子かな	緑陰に出発進行縄電車	麦秋や塩たつぷりの握り飯	新緑や車輛のひかる風の海	増築の表札ふたつ吊忍	十葉やきざはし暗き男坂	手術して視力戻りぬ青山河	菖蒲湯や鉢巻にする禿げ頭	長袖の腕まくりたき薄暑かな	五月生父母に感謝の八十路かな	落味噲を好みし妹は今亡き	鯉のぼり不平不満のなき空を	招き猫代わりの門に目高かな	走り梅雨突張り棒を締め直す	

◆水明インターネット句会◆ 令和七年五月		41	やはらかに風をくぐらせ柿若葉
		42	記憶より小さき母校風薫る
		43	メンデルに喰わせやりたやエンドウ飯
		44	青嵐産卵鯉のしぶき多々
		45	はつなつや駆けるをさなの膝の傷
		46	まず回し正面探すかき氷
		47	奥能登のあばら屋に立つ鯉幟
		48	落書きはもしやあの人あいの風
		49	網棚に残されし薔薇香り立つ
		50	風薫るトランジスタを海へ向け
		51	睡蓮や池に傘さす想ひ人
		52	昭和の日家族写真のすまし顔
		53	ドアノブに裾分けのメモ笹粽
		54	神輿かき追ってカメラも右左
		55	ゆうべ来て今朝朗らかにほととぎす
		56	ひかえめに咲いたつもりよ白牡丹
		57	薄暑の日人のまばらな選挙力
		58	八本は腕か足かと蛸悩む
		59	薄赤の花鮮やかに薄暑光
		60	水虫は親指襲ひ他指襲ひ

◆水明インターネット句会◆		令和七年五月	
61	小さき庭なれど夏草煩はす		
62	薫風や上り列車を待つホーム		
63	庭桜見事に咲けど一人かな		
64	バレリーナのアンデウトロア夏近し		
65	花びらの数だけ孤独ぼうたん咲く		
66	竹秋や乳飲み子眠る乳母車		
67	老夫婦語り合いし端居かな		
68	ごめんねの言葉が言えず草むしり		
69	カラー二本黒板わきの掛け花瓶		
70	絵心の有らばと想ふ夏野菜		
71	母の日も仕舞湯に入る母なりき		
72	朝日浴び葉擦れ華やか新樹かな		
73	夜更けまで天下祭りの笛の音		
74	巡礼の道に注ぐや新樹光		
75	五月晴れ母でいる日の薄化粧		
76	薫風や女結びのすぐ解け		
77	植田はやいのち耀ふ風ふきぬ		
78	鳶の輪の晴れ間を渉る五月かな		
79	百までとあつけらかんと新茶かな		
80	大西日ビルは地球に刺さつてる		

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	◆水明インターネット句会◆ 令和七年五月
甚平着て昭和の自模りゆうらりと	居間の絵をモネからダリへ初夏の風	藤棚の人去りてより匂ひ濃し	城山の夕日輝く代田かな	孫よそに視線泳げり夏の浜	ドンドコドン新樹の中を鼓笛隊	湾風ぐや湖面と紛ふ五月晴れ	薫風や嗣治の描く乳白色	補助輪のなき自転車や街薄暑	完璧な嘘つきとほす聖五月	中世の石垣残る青棚田	幼子の髪をくすぐる若葉風	虹を背に櫂をしづかにゴンドリエ	開山祭ホルン高らか梓川	真向いの空家空木の真っ盛り	江の島に早もサーファー夏きざす	連休や残り一日藤の椅子	目刺し焼く丹下左膳の心かな	ノラ老いて薔薇のアーチの繁るまま	鶯や牧を嗜むホルスタイン	

◆水明インターネット句会◆																				令和七年五月
120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	
緑陰を滑るせせらぎ轟けり	卯の花や鎮守の杜に紅袴	汗あゆる胸の炎を意識して	麦秋や金色（こんじき）の穂に風渡る	蜘蛛の巣や朝日を受けし水雫	君に逢ふ初めての島春の虹	明朗に鳴くや今年のほととぎす	また夫に惚れ直しけり神輿かき	夏つばめ三角屋根の駅舎へと	クローバーの花冠はまだ褪せず	走り梅雨道にしばしのにわたずみ	蜥蜴出づタツプダンスの如き舞	空豆や姫よ姫よと育てられ	かたつむり地球の果の遠きこと	五月田や雲を千切りみずかがみ	祭果て牧場へ帰る武者の馬	フアインダー一瞬過ぐる若葉風	どこまでも高みめざせる山の藤	母の日や遺影と分け合うよもぎ餅	葉桜やおほかたは老化と合点	